

# 「自然とかかわる保育」の実践的保育指導力の 男女差について（その2）

林 幸治

## Gender difference of Practicing Leadership for “Child Care Close to Nature” II

KOOJI HAYASHI

### Abstract

In order to investigate the grade of recognition of nature and life, when students were made to draw the picture of familiar life, some students drawing the picture of the chicken with 4 legs were seen. The tendency which the rate of the student drawing the chicken with 4 legs increases has been seen since the investigation start in 1994. As a result of analysis of gender difference, the rate of female students drawing the chicken with 4 legs is clearly higher than male students. It was suggested that the qualitative gender difference of natural experience in childhood was related as this reason. However, from comparison of the questionnaire result of natural experience within female students, the difference of qualitative natural experience was not seen between the student drawing the right picture (a chicken with 2 legs), and the student drawing the chicken with 4 legs. It is suggested that the reason of the result is related to the difference of ability in observation and expression.

### Key-word

nature, familiar life, chicken with 4 legs, gender difference, natural experience

### I. はじめに

この絵（図1）は、10年ほど前に本学保育科の学生が描いたニワトリの絵である。「4本足のニワトリ」現象は、1970年代後半より話題になり社会現象としてマスコミにも取り上げられた。当時は、自然破壊や環境問題との因果関係や感性をはぐくむ学校教育のあり方まで議論され、自然体験の不足や疑似体験の日常化がひとつの要因として指摘されている（宮脇ら1998）。

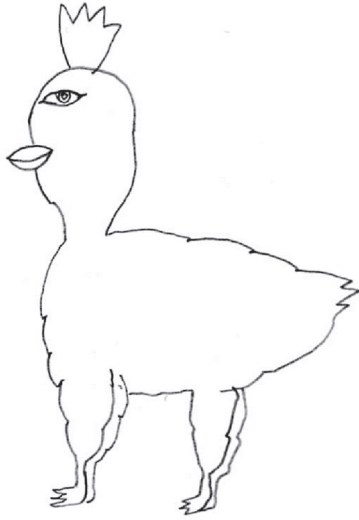


図1. 4本足のニワトリ

本研究では、この現象を確かめるために1994年よりニワトリを含む身近な生き物の絵を保育科学生に描かせ、生物形態の認識の程度を調査継続中である。この結果、図1のような絵を描く学生がかなりの割合で毎年存在していることがわかった（林 1994、2001）。

表現の自由として「4本足のニワトリ」を容認する動きもあるが、これはあくまでも子どもの絵に限られるものであって、将来幼児教育に携わる保育者の卵である学生たちにとって「つい、うっかり描いてしまった」ではすまされない問題である。保育者（教師）としてやってはいけないことは子どもにウソを教えることであり、知識や認識の不足から間違った情報を子供に伝えることは極力避けなければならない。保育士養成の立場からすれば、鳥（2本足）と獣（4本足）の区別がつかない保育者にならないよう水際で止めなくてはならない。

今回は、1994年から2005年度入学の学生を対象に、身近な生物の認識状況の年次変動や傾向などの分析結果を報告し、保育士養成に必要な基礎生物の知識や再教育のあり方の検討をした。また、2003年以降に入学した学生を対象にした自然認識や自然体験のアンケートをもとに「4本足のニワトリ」を描く学生とそうでない学生との比較を通して、「4本足のニワトリ」を描く学生に自然体験の不足が見られるのかどうか、その実態を明らかにし、このような現象が起る因果関係を再検討してみた。

## II. 方法

### 1. 生物形態の認識度の調査

調査は、1994年から2005年までの12年間、本学の保育科1年の学生（94年120名、95年123名、96年121名、97年109名、98年91名、99年81名、00年81名、01年100名、02年

97名、03年90名、04年99名、05年86名)に対して毎年5月に行った。

まず、身近な生き物として、動物ではニワトリを、また、植物ではチューリップをイメージさせ、何も見ずにそれぞれの絵を描かせた。絵の表現力や描写力の優劣は関係なく、描かれたそれぞれの生物の基本的な形態が忠実に描かれているかを基準にして、回収した絵の評価を行った。それぞれの生物の評価基準は、林ら(2005)の基準に沿って行った。この基準をほぼ満たしたものを正解とし、足の数など基本的な形態が正しく描かれていなければ、不正解とした。

## 2. 自然認識や自然体験のアンケート調査

下記に示す調査項目について、本学の保育科1年の学生(2003年:男子17名、女子63名、2004年:男子15名、女子84名、2005年:男子9名、女子77名)を対象にアンケートによる調査を行った。

- ① 虫(昆虫など)は好きですか。                    はい、いいえ(嫌い)、どちらともいえない
- ② 虫捕りをしたことはありますか。                はい、いいえ
- ③ 虫捕りをしたことがあると答えた人で、いつ頃虫捕りをしましたか。該当する時期に○を入れてください。  
幼児期、小学校低学年、小学校高学年、中学校、高校
- ④ どのような虫や動物を捕りましたか。該当する虫に○をしてください。  
チョウ、ガ、トンボ、バッタ、コオロギ、セミ、アメンボ、カブトムシ、クワガタムシ、カミキリムシ、ホタル、ハチ、アリ、カメムシ、カマキリ、ムカデ、ダンゴムシ、クモ、ミミズ、トカゲ、その他
- ⑤ 虫は触れますか。                                    はい、いいえ、どちらともいえない
- ⑥ 触れる虫には○を、触れない虫には×をしてください。  
チョウ、ガ、トンボ、バッタ、セミ、アメンボ、カブトムシ、クワガタムシ、ハチ、アリ、カメムシ、カマキリ、ムカデ、ダンゴムシ、クモ、ミミズ、ゴキブリ、ハエ、イモムシ、ケムシ
- ⑦ 動物を飼ったことはありますか。                はい、いいえ
- ⑧ 植物を育てたことはありますか。                はい、いいえ
- ⑨ 川や海で魚や生き物を釣ったり、捕ったりしたことはありますか。  
はい、いいえ
- ⑩ 子どもの頃、住んでいたところは自然が豊かでしたか。  
はい、いいえ

### Ⅲ. 結果と考察

#### ◆増加する「4本足のニワトリ」

図2は、1994年から2005年までの「4本足のニワトリ」を描いた学生の割合の年次変動を示している。年次変動のパターンは、1998年までは10%前後を、1999年以降は15%前後を、最近は20%前後を推移しており、明らかに増加傾向がみられた。

この増加傾向は、全国的に起こっているのか、または、本学のみの特異な現象なのかは今の時点では判断できない。本学における特異的な現象であるとするれば、観察力や想像力が低下した学生が年々増えていることになり、大学全入時代を向かえ学生を選ぶ余地のない地方短期大学の悲哀を真摯に受け止めなくてはならない。いずれにしても、他の学校や地域の比較など規模を拡大した調査が今後の課題である。

この現象が全国規模で起こっているとすれば、80年代に盛んに議論された自然破壊や環境問題がさらに悪化していることを示している。すなわち、都市化が進み自然とかがわる機会が減少する中で、幼少期における自然体験が不足した学生がさらに増えてきたことを示唆している。ニワトリを知っているが、本物を知らない、漫画やアニメの映像でしかニワトリを知らない学生が増加しているものと思われる。また、この期間に入学してきた学生は、日本経済のバブル期に子ども時代を過ごしてきた世代で、いわゆる「詰め込み教育」を受けてきた。主要科目（国語、数学、理科、社会、英語）が重視され、家庭科や芸術系の科目が軽視されてきた当時の学校教育のつけが今まさにこの現象に現れているかもしれない。図画工作や美術の授業時間が短縮され、物を見て描く訓練が不足し、表現力の低下が美術教育界では危惧されている。

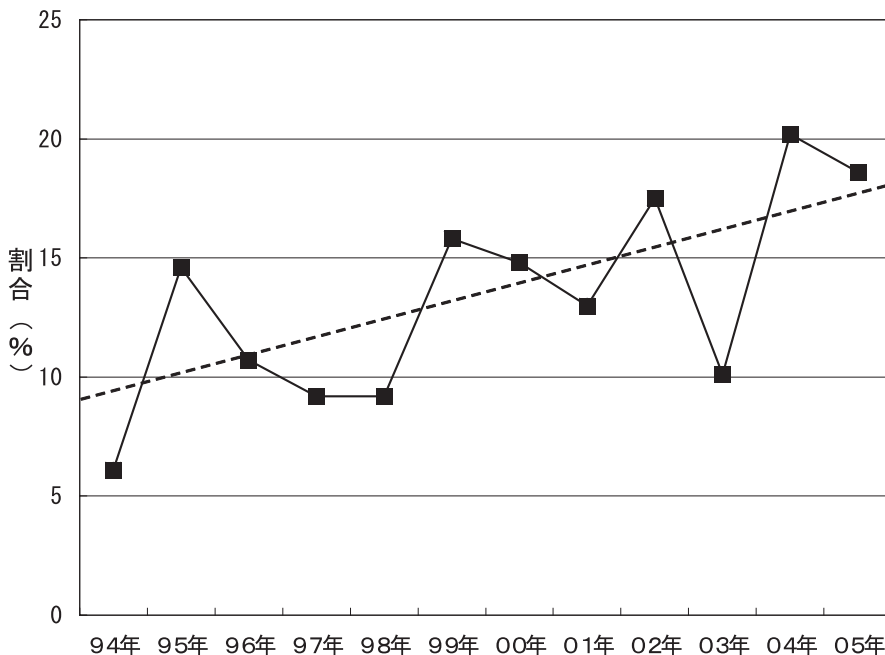


図2：「4本足のニワトリ」を描いた学生の割合の年次変動

近年、ニワトリやウサギなどの動物を飼育する幼稚園、保育園、小学校などが減少し、身近に生きた本物のニワトリを見る機会が減少していることも一因であると思われる。家庭教育においても、昔は、食用にニワトリを飼育するような家庭は多く見られ、生きたニワトリを調理して食べるのが当たり前であった。しかし、最近では、鶏肉はパック入りで店頭で売られ、ニワトリの原型はとどめていない。フライドチキンやから揚げなど子どもにとっては大好物のニワトリであるが、ニワトリの原型を知らないまま食しているのが現状である。食べるために生き物を飼育するという認識が欠落し、レトルト食品など加工された食材が主流になり、生き物を食べるという感覚は家庭教育からなくなりつつあるのではないかと。学校教育においても「命をいただく」ということを理解させるために生きたニワトリを処理して食べる食育が試みられているが、動物愛護の立場から反対の声が上がり、十分な効果はあげられていない。

2007年からは平成生まれの学生が入学してくる。これらの世代は「詰め込み教育」の反動で「ゆとり教育」を受けた世代である。「4本足のニワトリ」現象がこのまま増加するのか、もしくは減少するのか今後の様子を見守りたい。

◆女子に多い「4本足のニワトリ」

最近では、保育士養成校も男女共学化が進み、本学も2000年以降男子学生の入学が急増した。図3は、2000年以降入学してきた学生の中で、「4本足のニワトリ」を描いた学生の男女別の割合を比較したものである。男子は88人中6名(6.7%)であるのに対し、女子は450人中81名(18%)であった。カイ二乗検定の結果も有意な差が認められ( $P < 0.05$ )、女子ほうが「4本足のニワトリ」を描く学生が男子に比べて明らかに多いことがわかった。

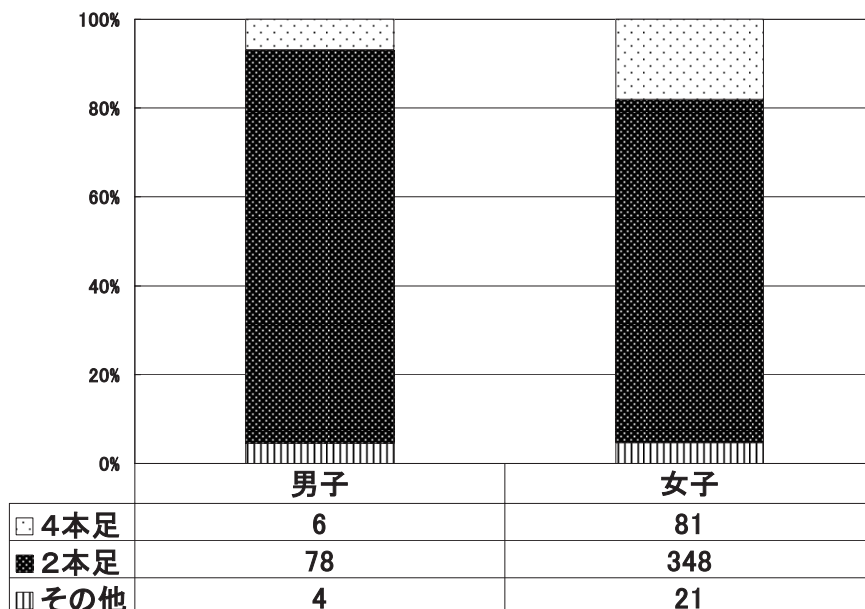


図3. : 「4本足のニワトリ」を描く学生の割合の男女比較

「4本足のニワトリ」現象が女子学生に多く見られる理由としては、幼・少年期の自然体験の質的な男女差が関係しているものと思われる。林ら（2005）の保育士養成校の学生を対象にした調査結果では、魚捕りなどの自然体験が男子に比べて女子では少なく、小さいころ虫捕りの経験はあるが、小学校低学年から急速に興味関心が薄らいでいくことが報告されている。一方男子は、虫捕りなどの興味は小学校高学年までつづき、虫が好きで平気で触れる「虫に強い」学生が女子に比べて多く存在する。自然体験の不足に加え、ファッションや恋愛などに興味関心のエネルギーがとられ、身近な生き物に対する認識が不足してきたものと思われる。しかし、チューリップの絵ではその正解率に男女の差は認められなかった。これは、生物の形態の認識力に男女差があるのではなく、興味関心の対象に男女差があることを示している。すなわち、女子では、虫などの気持ち悪いものには目を向けませんが、きれいな花には興味を示すようである。

◆「4本足のニワトリ」は絵が幼稚

チューリップは、子どもの絵に最初にでてくる身近な花で、6枚の花弁が重なり合って花先の凹凸ができる。子どもの絵では、花弁の重なり表現がなく、恐竜の足跡のようなチューリップの絵（足跡型）が多い。

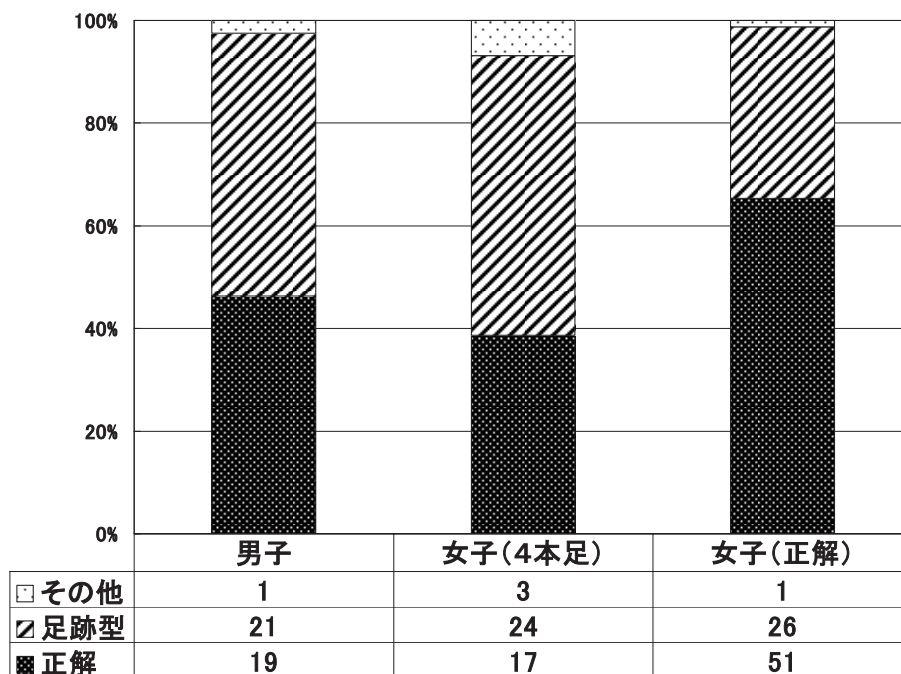


図4. : チューリップの絵の正解率の比較

図4は、チューリップの絵の正解率を男子及び女子のニワトリの正解者、女子の4本足回答者で比較したものである（自然体験のアンケートを行った2003年以降の学生）。女子の正解者及び女子の4本足回答者は、男子と比べると回答率に有意さは認められなかった（カイ二乗検定：正解者  $p = 0.138$ 、4本足回答者  $p = 0.464$ ）。しかし、女子正解者と4本足の回答者を比べると明らかにチューリップの正解率が4本足の回答者のほうが低く、足跡型の幼稚な絵を描く割合が高いことがわかった（カイ二乗検定： $P < 0.005$ ）。これらの結果から推測してみると、「4本足のニワトリ」を描いてしまった背景は、男子に比べ自然体験が不足しているのに加え、興味関心があっても観察力や表現力そのものに問題があるのではないだろうか。

幼児期における自然体験は、幼児の知的発達、情緒発達、科学的思考の芽生えなど重要な役割を担っている（林 2005）。「4本足のニワトリ」を描く学生が男子に比べて女子のほうが多く見られる理由として幼・少年期の自然体験の質的な男女差が指摘されているが、女子間で、自然体験の程度の格差が「4本足のニワトリ」を描く要因になった可能性がある。そこで、女子正解者と4本足の回答者の自然体験のアンケート結果の比較を試みた。自然体験は虫捕り、魚捕り、動物の飼育、植物の栽培の4つの項目で経験率の比較を試みた。その結果、いずれの項目でも女子正解者と4本足回答者で、顕著な差は認められなかった（図5）。

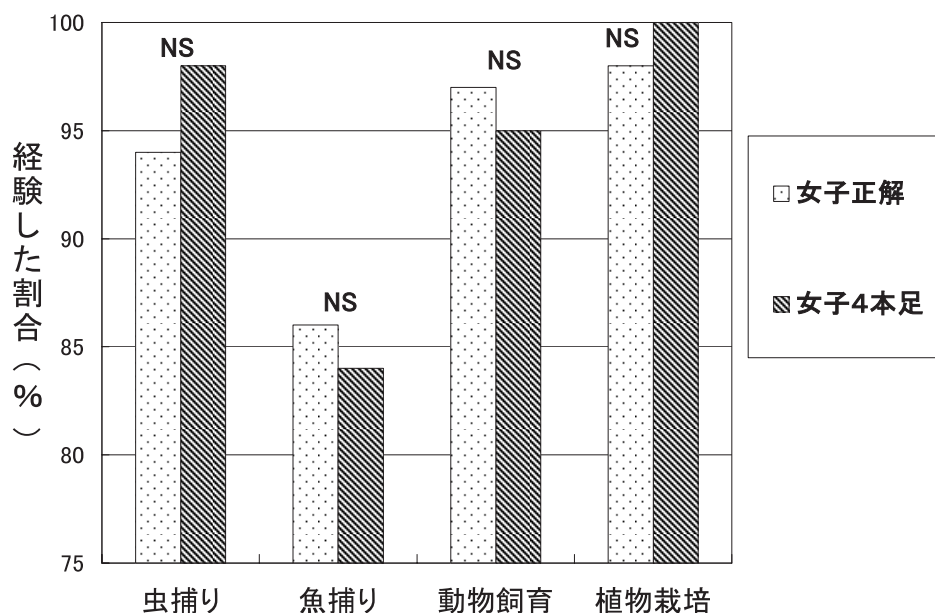


図5.：女子正解者と4本足の回答者の自然体験のアンケート結果の比較

これは、自然体験の不足が遠因になるとしても、自然体験に起因しない要因がほかにあると推察される。これは、ニワトリに対する興味関心の程度が同じであっても、ニワトリを認識する能力に格差が生じているのではないだろうか。すなわち、前述したとおり観察力や表現力そのものに問題のある学生が「4本足のニワトリ」を描いた可能性がある。観察力が鈍ければ、

十分な情報が入力されず、表現力が鈍ければ情報を十分に活用した出力ができない。このような学生が10人に1人から5人に1人の時代になってきている。早急な対策が急がれる。

## 附記

本稿は、日本保育学会第60回大会において筆者が発表した「自然とかかわる保育」の実践的保育指導力について－4本足のニワトリを描く学生の実態－に加筆修正を施したものである。また、本研究は平成15年度全国保育士養成協議会九州ブロック研究費助成を受けて実施いたしました。

## 参考・引用文献

- (1) 林幸治 (1994) 近畿大学九州短期大学研究紀要 第24号
- (2) 林幸治 (2001) 近畿大学九州短期大学研究紀要 第31号
- (3) 宮脇理編 (1998) 4本足のニワトリ 国土社
- (4) 林幸治 田尻由美子 (2005) 近畿大学九州短期大学研究紀要第35号